

21世紀の学力

学校長 今津孝次郎

「勉強離れ」

最近、子どもたちの「勉強離れ」が各方面で指摘されている。国内の各種教育調査でも、「勉強」への意欲が低下していることや、家庭での「勉強」時間が減っていることが指摘されているし、数学と理科に関する国際教育調査でも、日本の子どもたちの学力水準そのものは世界でも高いランクにあるものの、両教科を好きではないと答える割合が高いことや、学校外でそれらの勉強時間が他国と比べてきわめて少ないことが報告されている。教科嫌いや勉強時間の少なさという点での「勉強離れ」はいったい何を意味しているのだろうか。

かつて、教師や保護者が「勉強しなさい」といえば、その言葉は子どもたちにだいたい通じるものだった。ところが、今は大人が「勉強！」と叫んでみてもその神通力はかなり弱くなっているように見える。「勉強」が当たり前の学校時代を過ごした保護者の世代と、「なぜ勉強するのか？」と素朴な質問を投げつける中・高校生世代とのギャップの大きさが、しかも、そのギャップの存在自体がわからない大人の苛立ち、不安、学校教育への不信感などが渦巻いているかのようなのである。言ってみれば、これまでの伝統的な「20世紀型」の学力観と、今後新たに求められるべき「21世紀型」の学力観とがせめぎあっているのが現在の状況ではないのか、と私には感じられるのである。

「勉強」は中国語では「ミエンチャン」と読み、「無理強いする、強制する」という意味で、学習するという意味はない。中国語で勉強とは、「学習」(シエシ)または「学」(シエ)と表記する。なるほど、それで私たちは今まで無理強いされて勉強させられてきたのか、と変に分かった気にもなってしまう。「勉強」という言葉が殺し文句ではなくなっているとすれば、それは、これまでのような「勉強」の目的やスタイルが、今の子どもたちに対応出来なくなっていることを示しているのではないかと、つまり、子どもたちを取り巻く環境が保護者の時代とはまったく違っており、学習の在り方を根本から捉え直す必要に迫られているのではないかと感じるのである。子どもたちの「勉強離れ」は、そうした捉え直しの必要性を彼らが訴えている無意識的なメッセージなのかもしれない。

従って、論議が高まっている「学力低下」問題につい

ても、単に学力が低下したか否かということよりも、学力とは何か、何のための学力か、どのように学力を身につけるか、といった学力の根底のところをまずは探求すべきであろう。

もちろん、学力論議は、今に始まったことではなく、戦後から今日までそのときどきに取り上げられ続け、教育問題を越えて大きな社会問題にさえなってきた。振り返ると、どうも経済的に不況になったときに、学力問題が問われるという傾向があるようだ。「学力」という教育課題を借りて、実はむしろ「国力」が問題にされているのかもしれない。つまり、「国力」を実現する若手人材の能力のあり方を問い直しているのだろう。

「学力」とは、「学校教育を通じて獲得される能力」のことだとして大雑把に理解するならば、学校教育に如何なる能力や人材の育成を求めるか、については時代や社会の要請があることを否定できない。学力の意味も時代や社会とともに変化する。そうした側面があることを認めたい。それでも「学力」をめぐるオーバーヒート気味の議論のなかに、「国力」が念頭に置かれているとすれば、やはり少し頭を冷やして、個々の青少年が培うべき「学力」そのものを冷静にじっくり検討すべきであろう。それが、20世紀型と21世紀型の学力について比較することにもなるはずである。

「学力」の三側面

最近繰り返されている学力論議のなかで、重要な論点として注目したいのは、学力には次のような三つの側面があると一般に指摘されている点である。

- A. 興味・関心・意欲 (学ぶ意欲)
- B. 知識の獲得法 (学び方)
- C. 知識 (習得した成果)

学力はこうした三つの幅広い側面を持つと捉えれば、従来はもっぱら「C. 知識」が学力そのものであると狭く考えられてきたことがわかる。「詰め込み」といわれるように、必要とされる知識を教師が教科書に基づいて一方的に提示し、生徒はそれをそのまま理解して覚えていくのが「勉強」そのものだったわけである。それは「教師中心」の学習法といってもよい。

しかし、生徒の側で学習そのものが円滑に進んでいくためには、生徒自身が「A. 興味・関心・意欲」を示さないと、知識の習得が進んでいかない。子どもはよく好

奇心の固まりだと言われるが、何らかの力によって好奇心が押しつけられている場合や、あるいは眠っている場合、少しの好奇心はあるのだが、存分に発揮する態度が身につけていないことが、今は大きな問題になってきている。大学入試に合格しながら、その大学生が関心や意欲に乏しいという嘆きが、最近よく大学の研究者から発せられているからである。大学生の「学力低下」についてもっと議論しなければならないのは、分数が出来るか出来ないかということ以上に、この「興味・関心・意欲」がどうであるかであり、「学習者中心」の学習法をどのように実現していくか、という点なのである。

これまでは、受験という目的に向けた学習動機付けが中心であった。しかし、少子化と大学教育機会の増加に伴って、受験体制がやや緩やかになるとともに、また大学卒という価値がかつてよりは低下するとともに、学ぶ意欲は、学ぶこと自体の面白さを感じる態度がないと、興味・関心・意欲も持ちにくい事態となってきた。それに、21世紀では、画一的で規格に合った知識よりも、新たな独創性や探求心といった能力が要請されているから、ますます「興味・関心・意欲」が重要になってくる。それならば、これまで強調されてきた一方的な「詰め込み」は不必要かという点、決してそうではない。それは「B. 知識の獲得法」をどう捉えるかという点とかわる。

「知識」と「知」

附属学校にとって2冊目の著作の巻頭言を名大の松尾総長にお願いし、インタビューさせていただいた折り、「学力のしくみ」に関連して「詰め込み」の必要性について、おおよそ次のような興味深いやりとりとなった（松尾稔「双方向の教育」名古屋大学教育学部附属中・高等学校編著『新しい中等教育へのメッセージ』黎明書房、2003年、参照）。

頭のなかに情報の整理箱があると想像してみる。まず、整理箱の箱枠そのものを造らねばならないが、それは「詰め込み」によって可能となる。日本語の語彙や、九九、数学の公式、アルファベットなど、ある時期に徹底して詰め込まないと整理箱そのものができない。詰め込みは不可欠である。ただし、ただ詰め込めばよいということではなくて、何のための詰め込みかということに常に自覚することが大切であり、詰め込みはあくまで整理箱を有用なものにするためのものである。そして、整理箱ができたなら、それぞれの箱にさまざまな情報を入れていくわけだが、従来の「勉強」では、この箱にはこの情報を、とあらかじめ整理された情報をそのまま各箱に入れていくだけであった。しかし、それに止まっているは本当の学力は身につかない。21世紀は高度に発展した情報社会だから、実に多くの雑多な情報が頭に入ってくる。それを自分なりに整理して、しかるべき箱に入れて

いく。もし適切な箱が見あたらないければ、新たな箱を自分なりに工夫して追加する。それが独創的ということになる。

つまり、①箱を作る、②各箱に整理された情報を入れていく、③混沌とした情報を自分なりに各箱に振り分けていく、あるいは新たな箱をつくる。こうした三つの活動が総合されて21世紀の学力が身につけていく。従来の20世紀型の学力では、①②の二つだけで、③の活動が考慮されていなかった。この③こそがこれから求められる重要な能力である。

ここで強調された③の活動は、実は「知」と言われている作業にほかならない。与えられた知識を理解し、頭にたたき込むのではなくて、基礎的な知識を活用しながら、新たな知識を自分なりに作り上げていくプロセスにほかならない。出来上がった「知識」と、探求していく過程としての「知」とは異なる。21世紀に求められる学力は、この「知」の活動ということになる。そして、附属学校で8年前から取り組んでいる総合的学習をはじめ、最近の「新教科」や「選択プロジェクト」の狙いは「知」のプロセスを重視することと重なっており、明言していないとしても、21世紀の学力という目標を掲げているといつてよいだろう。

20世紀の学力と21世紀の学力

そこで、20世紀型学力と21世紀型学力の違いについて、もう少し具体的に考えてみよう。学力の三つの側面に即しながら、まずはいわゆる「受験学力」と呼ばれてきた学力内容を〈 〉内に具体化してみると、それがほぼ20世紀型学力となる。それに対して、「知」のプロセスも勘案しながら、今後新たに求められる学力を構想して《 》内に対置させてみると、それが21世紀型学力として理解することができよう。

まず、「A. 興味・関心・意欲」の側面に関しては、教える側から与えられる問題を中心に考えるか、それとも学ぶ側が自分で問題を設定する重要性を考えるかの違いとして、例えば次のような対比を挙げることができる。

- ・〈与えられた問いに的確に答える力〉…《問いを自分でつくる力》
- ・〈素朴な疑問や問いを無視する態度〉…《素朴な疑問や問いにこだわる態度》
- 「B. 知識の獲得法」の側面に関しては、所与の知識に到達すべき道筋と、「知」の過程との相違として、次のような対比ができる。
- ・〈短時間に答えを出すことに集中する力〉…《問いの探求を長時間にわたり持続する力》
- ・〈無駄なく一般的答えに至る力〉…《回り道をしながら独自の答えを求める力》
- ・〈限られた情報（模範解答法など）で判断する力〉…《多方面から情報を収集しつつ答えを探る力》

- ・〈失敗を未然に避ける力〉…《失敗から学ぶ力》
「C. 知識」の側面に関しても、所与の知識と新たな知識の探求との違いとして、次のような対比ができる。
- ・〈何が答えとして求められているかを予想する力〉…《予想されないような答えを探求する力》
- ・〈一つだけの答えを求める力〉…《多様な答えを求める力》
- ・〈教科の枠内の知識〉…《教科の枠にとらわれず知識を総合する力》

以上のように、〈 〉内に具体化した20世紀型能力や態度がこれまで「学力」として人々に理解されがちであったし、今もそのイメージは中・高校生の保護者をはじめ多くの人々のなかになお強く保持されている。

明治の初めに近代学校が成立して以来、日本は教育を「量」的に整備するという時代が100年以上にわたってずっと続いてきた。教師が画一的な教育内容を多くの子どもたちに一方的に伝達し、彼らはそれを受動的に受け取るという形態が取られた結果が、そうした20世紀型学力観であった。しかし、今や成熟社会の段階に達し、少子化の流れもあって、ようやく教育の「質」的整備が可能となり、教育の「量」から「質」への転換が強く要請されるようになった。子どもたちが自らの興味・関心に基づいて主体的に探求する学習を教師が支援するという教育形態の模索が始まったのである。つまり、「教師中心」から「学習者中心」への学習の転換である。総合的学習や少人数クラス編成、学習評価法の改善などの個々の教育改革も、あくまでそうした教育の「質」を向上させるための具体的な方策として把握し、常に「質」の観点から再検討をしていくという大きな視点を見落としてはならないだろう。学力の捉え方も、そうした大きな変化の潮流のなかに位置づけることがなによりも大切である。

【付記】本稿は、2002年7月9日に開催された「附属中・高等学校PTA研修会」での講演「21世紀の学力」の概要に加筆修正を加えたものである。